

序

厚生省児童家庭局母子衛生課（当時、小林秀資課長）の御尽力により、昭和59年厚生省心身障害研究のなかに、小児慢性腎疾患研究班が組織され、第1次研究プロジェクト「小児慢性腎疾患の予防管理治療に関する研究」及び第2次研究プロジェクト「小児腎疾患の進行阻止と長期管理のシステム化に関する研究」がそれぞれ3年間実施された。この種の研究が6年間継続されることは、非常に稀なことであり、このことは、研究協議会常任委員各位、北川照男、酒井糾、橋爪藤光、小沢憲二の各班長、ならびに研究に参加いただいた各方面の多数の先生方の御努力の結果と厚生省当局の御理解の結果として敬意と謝意を表す。

従前の研究結果は、既に各年度毎に報告書を刊行しており、また、平成2年度の成果は本報告書にまとめた。当研究班は、本年度の研究をもって一応終了することになり解散することになっているが、これまでの研究によりすべてが解決したのではなく、なを多くの研究が残っている。

「進行阻止に関する免疫・遺伝・病態生化学研究班」（班長：北川照男教授）は、施設で管理されている小児原発性糸球体疾患の長期予後を調査したが、従前このような調査はなく貴重な成績である。

学校検尿で発見され成人にキャリアオーバーする頻度の最も高いものは、IgA腎症であり、そのうちでも特定の組織型を呈するものの頻度が高いことが指摘されており、その進行阻止に関する研究の継続が必要であると認めた。

小児腎炎に基因する小児腎不全は減少しているが、先天性腎尿路奇形、逆流性腎症、慢性腎盂腎炎による小児腎不全は減少しておらず、その早期発見と治療の重要性が増加している。従来の学童検尿システムでは、対応出来ず、あらたに有効な幼児検尿システムの確立が必要であると指摘している。

「小児腎疾患の長期管理における運動・食事・社会心理に関する研究班」（班長：酒井糾教授）は、小児腎疾患患児の疾患別、病態別の運動負荷の影響を検討し、尿蛋白分析像が、腎機能予備能を推測する指標となりうるとの成績を報告している。今後、各患児に対する運動処方ガイドラインの作成が必要であろう。

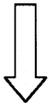
「小児腎疾患の医療と教育に関する総合的研究班」（班長：小沢憲二院長）は、入院期間の短縮傾向が認められるものの、長期入院を余儀なくされる慢性腎疾患患児にとっては、病院が生活の場であり、ソフト面のみならず生活の場としてのハード面の検討が必要と認めた。

本研究は、本年3月で一応終了したが、以上のように今後の検討に期待する面が多数あり、「腎不全医療研究班」（班長：三村信英院長）の成人慢性腎疾患を対象とした retrospective の研究成果と総合してわが国の腎不全対策の樹立がのぞまれている。

また、本研究班に参加した施設で管理中で予後調査の対象となった小児原発性糸球体疾患患者については、今後定期的なフォロー・アップを行い、本研究の対策を評価することがのぞまれる。

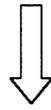
本研究の終了にあたり、研究班に参加いただいた先生方の御努力にお礼申し上げますとともに、厚生省当局のご支援に感謝する。

総合班長 石丸隆治



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



厚生省児童家庭局母子衛生課(当時、小林秀資課長)の御尽力により、昭和59年厚生省心身障害研究のなかに、小児慢性腎疾患研究班が組織され、第1次研究プロジェクト「小児慢性腎疾患の予防管理治療に関する研究」及び第2次研究プロジェクト「小児腎疾患の進行阻止と長期管理のシステム化に関する研究」がそれぞれ3年間実施された。この種の研究が6年間継続されることは、非常に稀なことであり、このことは研究協議会常任委員各位、北川照男、酒井紉、橋爪藤光、小沢憲二の各班長、ならびに研究に参加いただいた各方面の多数の先生方の御努力の結果と厚生省当局の御理解の結果として敬意と謝意を表す。